

スマホの眼から見る世界

福岡国際医療福祉大学医療学部視能訓練学科 教授

森 望

コロナ禍の中で迎える三度目の春。入学式もやはりマスク着用で新入生の素顔を直接見ることはできないけれど、今年の桜はその節目にもまだたくさんの花を残してくれていた。視能訓練士になる、あるいは言語聴覚士になる、そんな医療現場の一翼を担う感覚器のスペシャリストをめざす若者たち。そのマスクの奥にはきっと入学への喜びとその道への覚悟とが入り混じった笑顔があったと思う。皆が夢を叶えてほしい。桜の下で思うのはいつもそんな想いだった。

私がこの大学に来てもう4年目になる。すると学生たちにも卒業研究という課題がふりかかる。現場ですぐに役立つ実務ではないが、将来それぞれの専門職で奮闘する中で、既存の知識や技術では解決できない問題点、そんな壁にぶちあたることがきっとあるだろう。その壁を乗り越えてゆく原動力は、自らの創意工夫、それに尽きるのだが、その礎には常日頃からの探究心、研究心がなくてはならない。

卒論のテーマとしては、以前であれば、これまでの経験から、光受容や感覚情報処理の脳内機構などを考えてみたりもしたのだが、そういう根源的な基礎研究も大事だが、一方ですぐに役立ちそうな応用研究も患者や障害者の方のことを思えば大切に思うようになってきた。

先日、知人が「散歩のお供にいいですよ」といつてスマホのアプリを見せてくれた。スマホの画面の四角い枠内に道端の花を写真に撮る。するとしばらくして、その花の名前が出てくる。「AIが答えてくれるんですよ」今は何でもAIの時代だ。画像診断にも研究開発にもAIの活用は必須だ。人間よりもすぐれものと思ってしまうのは残念だが、それでも

すごい武器であることはよくわかる。しばらく歩くうちに、もう10種類ほどの花の名前が明らかになっていた。きっと学生は、「すべての勉学で、そんな時代になったら」と思うに違いない。

『眼科ケア』の読者には改めて言うまでもないことだが、視覚情報処理の入り口としての「眼」のすごさは限りない。最近、重要と思うのは、「眼」を「脳をみる窓」としてみる視点である。いわゆる眼底検査なのだが、網膜の神経細胞は脳へ直接つながっている。だから、最近の知見からするとアルツハイマー病も眼から診断することが可能となるかもしれない。認知症検査が、精神科や神経内科ではなく、いずれ眼科で初期検診ができるようになるかもしれないのだ。

一方で、「スマホの眼」からしてみれば、それをかざすことで花の名前がわかったり、あるいは眼底写真からAI経由ですぐに病名が出てきたり、そんな時代になるのだろう。考えてみれば、「スマホの眼」は盲導犬の代わりにも十分なるだろう。全盲の方が白杖をたよりに歩く、そんな時に、首から掛けたスマホで「画像モードオン」にしておけば、画像が捉えた眼前の状況を簡略に解説してくれるようになるだろう。行く道の危険サインの情報だけでなく、花の色や空の高さや、ふくよかな空気感まで歩きながらのお供として解説してくれる。「Hey、Siri、ありがとう」。視覚障害のサポートもそんな「盲導スマホ」できたらと、視能訓練士をめざす卵たちと、卒論テーマに思いをめぐらす。考える力を伸ばしてほしい。

注) 最後のところ、Siriではなく、ここはViri (visual interpretation and recognition interface) とすべきだったかもしれない。